

住民と自治

編集・自治体問題研究所

【座談会】

どう受けとめるか 老人保健法

高齢化社会の到来が意味するもの

座談会——第10回統一地方選前半戦の結果から
草の根の“せりあい”の中で

地区計画はまちづくりの救世主たりうるか 佐藤圭二

第25回自治体学校オリエンテーション

1983





草の根の〴〵せりあい〴〵の中で

——四月一〇日、統一地方選前半戦が終わり
ました。また、二四日の後半戦、そして国政
選挙がひかえていますので、結論的なことを
テーマへ選挙結果から

いいにくいとは思いますが、読者への問題
提起を含めて論議いただければと思います。

保守・中道連合との

草の根のたたかい

——83年政治決戦の第一ラウンド——

報告者 にの二 みや宮 あつ厚 み美
(大阪外国語大学助教)

今回の地方選、とくに知事選の位置づけ
は、中曽根首相自身が告示第一声で「私は八
三年は、戦後総決算の年といったが、総決算
は地方から始まる」といったことに端的に示
されていると思います。

この八三年決戦の第一ラウンドの争点です

が、第一は、中曽根軍拡路線の足腰を固める
というか、二一世紀に向けた国づくりの路線
を地域レベルに押し広げて、その基盤を強化
することを許すかどうかということでした。
第二は、臨調路線とかかわりますが、地方
行財政改革によって、新技術の開発、先端技



二宮厚美氏

術集積都市構想にみるような新しい地域開発の地盤固めを許すかどうか。この点は、いわゆる農村部の知事選挙でも大規模なプロジェクトが目玉になっていただけに見逃せないと思います。

三点目は、政治路線の選択の問題です。いわゆる保守・中道路線の進行を地方レベルから認めるのか、新たな革新の息吹きをつくりあげるかどうか、ということですね。

選挙の結果は、御承知のように、東京、福岡、大阪、北海道の四大知事選で保守・中道連合は二勝二敗になりました。ただ、道府県議選では、自民党は得票率で前回の四三・一%から四六・一%に伸ばし、社会党は一六・

八%から一四・四%に減り、公明、民社はそのほど減りませんが、共産党は得票率では七・一%から九・三%に伸ばしたものの、議席数ではかなり落ち込みました。この結果に対して、マスコミは中曽根路線に歯止めがかかったと評価していますが、私は、中曽根政権への打撃とともに、拮抗戦が草の根で続いている、対峙状況が続いているという感じを持っています。

地方選で問われたもの

そこで私は、討論に際して三つほど議論の素材を提供したいと思います。

一つは、国政レベルの争点と地方レベルの独自の争点との相互関係の問題です。国政レベルの争点では、代表的な平和の問題、福岡でみられたような政治倫理の問題、あるいは老人医療無料制度廃止にみられるような臨調路線が争点になったのはたしかで、革新票の掘りおこしに積極的な役割をはたしました。ところが他方で、かつての公害問題や七〇

年代初頭の憲法知事、福祉知事の実現というような、全国的な高揚のもとで統一地方選挙がたたかわれたかという、残念ながらそこまでいかなかった面もあったのではないかと、全国的な争点が地方レベルでたたかわれ、ナショナルな意味での統一的地方選挙になっただかといえ、いま一つの感がある。

この理由は、社会党のねじれ共闘とか、公選法改悪の影響などがありますが、日本の政治の中に保守・中道路線が広く浸透したことが大きい。大阪では、自民党はいわゆる無風選挙、波風のたたない選挙をすすめたいと言っていましたし、中道勢力は「中曽根首相が応援に來ないのが最大の応援である」という本音を語っていました。つまり、保守・中道勢力は「国政と地方政治は別のもの」と言いながら政策的争点を可能な限りさけて、組織戦に持ち込もうとした。このため、国政レベルの争点が地方選挙をわける国民的争点として、全国を燃えさせた大きな障害がうまれた。

第二は、国政および地方政治の政策と市民

の選挙ないし政治意識のズレを問題にしなればいけないのではないか。今度の地方選挙を前にしたマスコミの世論調査では、地方選挙に望む声として、一つは福祉・医療・教育、二つめに雇用・景気対策、三つめが公害問題といういわゆる三大争点が明らかに上位を占めていた。

〔討論〕

83年政治決戦とは何か？

——それでは討論に入っていきたいと思いません。まず八三年決戦の位置づけから。

古城 支配層がどういう戦略を持ってこの地方選にのぞんでいるかは二宮さんのいう通りだと思いますね。ただ、軍事化路線にかかわっては今度はおきられなかったけれども改選問題がある。ここで相手側はまだカードを一枚残していると思います。

それともう一つ、自民党が組織政党として七〇年代を通じて組織固めをしてきている。この点では、総裁予備選が重要だと僕は前か

革新陣営はこの三大争点について政策的優位に立って打って出たんですが、必ずしも選挙が燃えない、選挙を通じた政治参加に結びつけ得ないというイラダチが残ったように思いますが、どうでしょうか。

第三は、あとのテーマにもかわると思いますが、政党政治と市民参加の問題です。争

ら言っていたんです。これとコミュニティ政策ですね。これで地域末端まで草の根保守主義の網をかぶせることができたわけです。こうした基盤固めのうえで八三年決戦がうち出されたことが重要です。

加藤 草の根保守連合戦略が、この地方選の中でどう位置づけられていたかが重要だと思いますね。六〇年代から始まった大企業の中のとりこみが、七〇年代には町内会までを含んだ地域マシーンをつくるというかたちです。すんで来た。「日本を守る国民会議」の元号法制化、スパイ防止法、自衛隊法改正決議など、地方議会を着々と固めていこうとしている。自民党は都道府県議選で、前回の一六

点回避と逃げの作戦に出た保守・中道連合に對抗して、革新勢力が棄権層とか支持政党なし層をどう掘り起すか。この層のもつ潜在力を政治参加に結びつけられ、新しい革新のうねりが期待されるのではないか。投票率の高かった福岡で、その動きがみられただけに考えておかなければならない点だと思います。

七二万票から二二二万票と約五四〇万票もの掘り起しをしている。

ただ、露骨な反動化はとりあえず中道のとりに込みとの関連で前面に出てこない。しかし二一世紀に向けた戦略の中に確実に入っている。

二宮 大阪でも、投票日の一週間前の新聞世論調査で、自民党支持層の八割から九割、民社、公明支持層も七・八割が岸氏で固まっていた。たしかに組織の拡大というよりも組織性の強化がすすんでいる。八五年体制構想で打ち出された中産階級の組織化と労働組合のとりこみの二つが投票マシーンの柱になっているということですね。

加藤 草の根戦略で考えておかねばならないのは、一つは地域・生活連関を通じた保守の組織化だと思う。国会議員から地方議員、町内会、後援会を通じたマシーン型選挙ですね。北九州市では町内会が政治結社をつくってぐるみ選挙をやっているという。もう一つは、経営・生産関連の組織化です。財界の場合には中小企業、業者団体や青年会議所のような組織を通じて、大企業の場合には下請、系列を助かして、家族にまでくい込んでいく。

これは、政党間での中道のとり込みとはちよつと違った次元での保守化・反動化の進行だと思ふんです。

古城 ただ、そうした意味では自民党はもう重要なカードを切ってしまったわけです。だから、これからも大きく伸びていけるカードは残されていないのではないかと。

全国的争点を生活に密着した争点に持っているか

44道府県議選 (4/10) と市町村議選 (4/24)
党派別得票率と得票数、当選者数

	県議選 得票数	県議選 得票率	県議選 当選数	9大市議 当選数	一般市議 当選数	町村議 当選数
自 民	22,118,107 (16,719,043)	46.8 (43.1)	1,487 (1,406)	232 (204)	1,439 (1,227)	263 (209)
社 会	6,810,378 (6,517,076)	14.4 (16.8)	372 (379)	112 (105)	1,219 (1,298)	504 (546)
公 明	2,972,472 (2,501,562)	6.3 (6.5)	182 (166)	122 (117)	1,149 (1,117)	609 (638)
民 社	2,113,618 (1,883,798)	4.5 (4.9)	100 (106)	69 (63)	429 (413)	48 (47)
共 産	4,399,092 (2,767,478)	9.3 (7.1)	85 (122)	74 (93)	926 (930)	772 (744)
新自ク	354,307 (676,932)	0.8 (1.7)	16 (27)	6 (9)	21 (28)	0 (2)
社民連	83,601 (122,207)	0.2 (0.3)	6 (6)	1 (0)	11 (15)	0 (0)
諸 派	825,658 (531,575)	1.7 (1.4)	41 (43)	13 (9)	9 (27)	5 (5)
無所属	7,538,664 (7,033,934)	16.0 (18.2)	371 (390)	36 (67)	6,872 (7,269)	20,102 (20,989)

- 1) 上段は今回、下段は前回(79年) あん分票は加えていない。
- 2) 79年の市町村議選件数は、385市議、1,304町村議選、83年は383市議、1,154町村議選。79年の定数は市議12,324、町村議23,180、83年の定数は市議12,075、町村議22,303と定数の減がある。
- 3) 朝日新聞83年4月12日、4月26日付より作成。

——保守・中道連合の問題を草の根保守連合とかかわりで討論したわけですが、続いて政策、争点の問題にうつって下さい。

加藤 ポイントはやはり、地域レベルの争点を国政とどのように結びつけるのか、あるいは国政レベルの争点を革新勢力が地域住民の生活意識に密着した争点に持っていきけるかどうかだと思うんですね。

たとえば福岡の場合、政治倫理、金権という全国的な争点が、亀井という格好のミニ角栄型候補者もいて、「清潔な政治」が地域レベルで争点になった。福岡の革新のスローガンは「もうゴメン、腐敗とおごりの県政は」「長すぎる一六年間の県政は」で、国政の争点をうまく地方レベルでかみくだいて出していますね。北海道でも、勝手連の動きもあるけど、道民の反中曽根、反軍拡の意識は他の自治体と比べても非常に高いものがあつた。横路という候補者のイメージもそこにうまくフィットしたと思うんです。相手候補が警察官俵あがりだったし。

東京の場合、平和を前面に掲げてたかっ

たのですが、どこまで浸透しきれたんだろうか。結果論だけど、棄権層を巻き込むところにまではいっていないと思う。そういう意味では、臨調行革なり平和をナマの形で地方選挙レベルで争点にするのではなく、それが府県政の中でどうあらわれているかを争点にしないといけないのではないかと思うんです。

二宮 臨調路線の圧力を背景に、福祉や教育が全国レベルの前進的争点としてナショナルにたたかわれる点での不十分性に關していうと、七〇年代前半には地方の福祉水準を引上げることによつて、国の水準を引き上げるといふ、攻勢的な運動がありましたね。それで革新陣営の全国的進出がすんだ。

ところが今回は、国政レベルの反動化が中曽根の登場によつていっきよに突出した。それで平和が大きな争点に浮かびあがつた。それに対して保守・中道連合は「国と地方は違ふ」として切り抜けようとしたという面がある。

加藤 誤解のないように言っておくと、東京でも非核宣言や基地問題など、平和を争点に

するためにたいへんな努力をした。ただ、平和が争点になった首都の選挙であつたならば、三多摩なんかでは投票率もっと上がつていいはずなんです。四年前の太田さんの中には三多摩で半分くらいの地域で勝つてただけれど……。

古城 平和が争点にならなかつたというのは、ちょっと意見が違ふんです。僕は、平和や反核がそのまま地方選挙でも意味をもつ地域や市民層があると思う。その点では、今回の東京の場合はやはり意識があつたと思う。「生活レベルから行かねばならない」の二本やりでは十分な活力を引き出せないのではないだろうか。

加藤 それはそうだと思う。東京でも鈴木票にはリードされたけど、前の太田票よりも松岡票が多かつたところは、港、新宿、渋谷、世田谷、杉並、八王子、昭島、町田、日野、国分寺、国立、狛江、多摩の一三区市あつたわけですから。それにしても、僕は投票率の問題、棄権層の問題もみておきたい。

保守回帰はまだ続く？

—政策の訴えが投票につながるという問題は、あとのテーマに関連しますから残しておきたいのですが……。

加藤 これについては政策を市民に訴える手段が制限されていることが問題だ。公選法改悪の影響が大きいことを言っておかなければならない。「べからず選挙」「くらやみ選挙」で、東京の場合は都議選がないから候補者カーが二台ずつ、政策ピラも二回しか出せない。立会演説会が六回で七四四六人（前回比二八%減）、不在者投票も一割減った。

古城 公選法はほんとにひどいね。それから二宮さんの報告を補足する意味で、一九七一年以降の県議選の結果にふれておきたいのですが、ここではかなりはつきりした傾向が出ていますね。自民党と公明党はずっと得票率を伸ばし、議員をふやしている。これに対し社会党は一貫して得票率を減らしてきている。民社党と共産党は波を打っているんで

す。民社は七一年と七九年に少し上がって、七五年と八三年に少し下がっている。共産党はその逆の波のうちかたです。

ここからいえることは、保守回帰は、現象としてまだ続くだろうし、国政選挙にも反映するのではないかといいことです。

加藤 自民党と公明党は着実に組織をつつてきた。革新の側は組織戦においてやや守勢にあるといえるのではないかと。

二宮 全体として「政治離れ、組織離れ」現象が進みながら、保守層の基盤がその中でもある面で持続することはある。世論調査をみても「生活が苦しい」「これからも楽になりそうもない」という人が年々ふえているが、しかしそれが革新に直結するとは限らない。時間がない、生活が苦しくて政治どころではないということもあるでしょう。

古城 それがよくいわれる「中産階級の蜂起」という問題だと思う。単に経済的に苦しいだけでなく、大都市部では家庭生活が崩れてきていますよね。これが革新にこない。この時に保守側にどりとこまれていくキーポイント

44道府県議選得票率と当選数の推移

	得票率				当選数			
	71年	75年	79年	83年	71年	75年	79年	83年
自民	47.0	42.2	43.1	46.8	1,417	1,391	1,407	1,487
社会	19.4	18.3	16.8	14.4	471	422	379	372
公明	3.9	6.6	6.5	6.3	94	167	166	182
公民	5.0	4.4	4.9	4.5	96	103	106	100
共産	7.5	9.6	7.1	9.3	105	95	125	85
新自	—	—	1.7	0.8	—	—	27	16
社民	—	—	0.3	0.2	—	—	6	6
社派	1.2	1.5	1.4	1.7	26	40	42	41
無所属	16.1	17.4	18.2	16.0	347	391	387	371

トは、僕は、日本的な政治文化ではないかと思う。みんな会社では働きものだし、家ではいいお父さん、いい奥さんなんです。しかしこの人たちのナショナル、コミュニケーションな感覚に訴えかけるのは効くんだね。企業共同体、地域共同体を訴えて保守に組織するわけです。だから、これを打ち破るのはそう簡単ではないと思いますね。

加藤 保守回帰に歯止めがかかっていないというのと同じ意見です。福岡と北海道という地域で歯止めの動きがみられたということでもテーマ2(革新統一と市民)

「勝者なき選挙」というのが前半戦のいつわらざる感想です。この状況がどう推移するかについては、八三年の一連の選挙全体が終

わってみたいと何ともいえない。——このあたりで第二のテーマに入っていきたいと思います。

政党の力と市民の力

のむすびつき

報告者 古^{ふる}城^{まき}利^{とし}明^{あき}

(中央大学教授)

私は、表題のテーマについて、平和と革新、民主主義と自治を実現していくために、

支配層に対抗する力量をどう発展させていくかという観点から、前半戦が何を示したかということ、三点報告したいと思います。

まず第一は、社会党、共産党、労働組合の革新勢力の統一が、今回の場合も重要な意味を持ったということです。福岡の勝利はその典型だし、東京もこの点が重要だったと思います。支配層の戦略は「革新統一の分裂」にポイントがあったわけで、これを下からの力に依拠してはね返すことができたということ

が重要です。これは全国的な意義をもっただけでなく、将来にとっても意義があることです。

第二は、市民の力が重要な意味を持つてきているということです。東京の場合、革新の分裂を防ぎ、統一を実現させたのは、市民の有形、無形の力があつたと思うんです。先に「下からの力」といったのはこのことです。

私は、市民というのを、自立的な人間型と広く定義しておきたいんですが、こういう市民は、六〇年代後半以降の住民運動の中で芽ばえたとおもうんです。住民運動を支えていた生活者主体性といわれるものは、一つは、高度成長の中ですんだ生活破壊、環境破壊に對して反発していく主体性であつたし、もう一つは、その過程で民主主義と自治の意味を体得していった主体性であつたと思います。私は、このとくに後者の市民が、今回の選挙



古城利明氏

において下からの統一の大きな力になったと評価しています。

これと並んでもう一つの市民の型が出てきたのが注目されます。「勝手連」という——勝手というのはある種の自立という意味を持つていると思うんですが——文化スタイルを持った政治参加が注目されたわけですね。もちろん、新しい市民の型だけで選挙戦がたたか

〔討論〕

市民が参加できる運動

スタイルが問われた

——市民の力を革新統一に結びつける上での政党の役割というあたりに論点をしぼって討論をすすめていただければと思います。

加藤 革新勢力と市民の結びつきを考える場合に、それを選挙の政治過程のそれぞれの局面で分けて考えてみた方がよいと思ってるんです。具体的には、まず共闘することがきま

えるわけではないのですが、そういう層がふえているのは確かかわりで、この層をどうやって革新統一と結びつけるか。今後を考えるうえで重要なポイントだと思います。

第三の点は、政党、労働組合の力と市民の力の結合ということ、それぞれの地域ごとに創造的に発展させていくことが大事だということですね。福岡のように社共両党、労働組

らは、政策づくりの段階、争点づくりの段階ですね。それから選挙の組織のレベルと運動のレベルでも分けてみる必要があると思う。

福岡の場合は、昨年一二月に社共が政策協定、組織協定をむすんで、県評、中立労働、統一労働組、学者文化人などを合せて候補者が協定書にサインするという原則的なスタイルだったけれども、その後の選挙の展開の中で主婦層、中間層、一部保守層の票の掘り起しに成功した。これは、政策づくりよりも争点づくりのレベル、組織のレベルというよりも運動のレベルで共闘の力と市民の力のうまいかみあいがあったと思うんです。東京の場

合の革新統一が力を発揮しるところもあるわけですが、とくに東京や大阪のような大都市圏では、血縁や地縁に組織されない自立的な市民の基盤、日本的な市民社会があらわれているわけですから、革新政党はこの力を引き出すヘゲモニー——ヘゲモニー主義という意味ではなく——に習熟する必要があると考えています。

合は、市民の力があって統一が実現されたけれども、候補者選定の過程が長びいて市民にみえにくくなったことが、その後の選挙運動の過程で市民の力をさらに結集するうえで問題を残したように思うのですが……。

二宮 大阪でみると、東京、福岡で社共共闘ができたのは激励になりましたけどね。統一戦線が発展する過程で、どうしても欠かすことができない役割をはたしてくれたわけですから。むしろ大阪のように六党相乗りは、政策づくり、争点づくりのうえで政党がはたさなければならぬ役割を自己否定してしまっている。

古城 東京の候補者選びの問題は、加藤さんのような問題もあったけど、学者・研究者は千数百人が結集したわけで、これは六〇年安保以来でしたよ。ただ、すぐ実際の選挙に入ったから組織戦が前面に出てきて、市民は組織戦はあまり得意でないから、うまく結びつけられなかった。市民の意識的な層は下から支えたけれども、そこからもう一つ輪が広がらなかつたとは思いますね。

——北海道の「勝手連」がマスコミで高く評価されていますね。あれはどうですか。

古城 僕はそれなりに評価していますね。きっかけはいろいろあるだろうけど、無関心層や棄権層を反保守・中道連合に引きつけたという意味では評価できます。組織されない層はこれからもふえていくわけですから、この層を引き出す政党の役割、力量が問われるでしょうね。

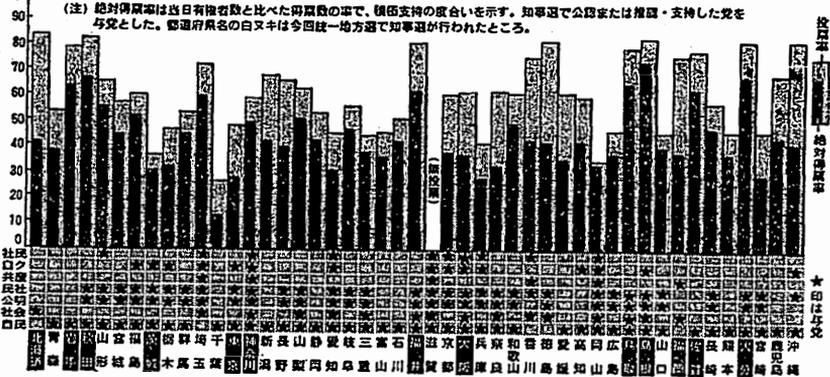
加藤 世論調査で支持政党を答える層の八九割は、そのままその政党系列に投票するといわれます。ところが知事選や市長選になると何らかのかたちの連合が組まれることが多

いですから、政党支持とは異なった選択様式が働く割合が大きい。そこで、それぞれの人の内部にセットされている投票行動を変える契機になるのが、市民運動の高揚なり、選挙の運動スタイルや争点づくりだったりする。それをうまく引き出す役割を果たしたのが「勝手連」だと思う。

二宮 無党派層といわれる人々の生活の文化的様式が変わってきてるのは明らかですね。彼らは市民生活の中でいろいろなネットワークを持つている。必ずしも政治性を持っているわけでもなければ、自治体行政と直接つながっているわけでもない文化のネットワークが相当あるわけです。地域に根ざした従来の共同体のネットワークとは違ったものですね。ここで誰れかが発起人になって、「やってみようか」という気分になった時に、従来の政治組織ではつかみ切れなかったところにまで広がって政治と結びついていく。「勝手連」的現象をみていてそういう感じを受けましたね。

——多様なネットワークづくりは、革新勢力

各都道府県の知事与党と知事選投票率、知事の絶対得票率



朝日新聞 83年4月12日

の課題でもあるということでしょう。時間 も少なくなってきましたので、次のテーマに
テーマ3 〈市民意識への働きかけ〉

棄権層・無党派層と

戦後民主主義

報告者 加藤 哲郎
(二橋大学助教授)

僕はこの選挙の期間中、一番印象に残った新聞記事は、朝日新聞で四月一日から六回連載された「選挙が危ない」という記事です。ここでは、小学校で水永大会の選挙を選ぶと



加藤哲郎氏

きにわざとカナツチの子を選ぶとか、PTAの役員選挙の投票用紙スリカエ事件とか、企業ぐるみ選挙、それから選挙の自殺行為である立候補妨害事件などが書かれていました。

僕は、世界的には二〇世紀、わが国では戦後になってようやく実現した普通平等の自由な秘密選挙は、戦後民主主義の根幹にかかわるものだと考えています。日本国憲法の基本原理として、国民主権、基本的人権、平和主義などがあげられますが、この基本原理が作動する前提に普通選挙があるわけです。これは原理的には形式民主主義なのですが、実は

うつつて下さい。

「形式民主主義とはまさしく国家の民主的性を継続的に保証する偉大な発明であり、その民主的性格の絶対的前提である」(アグネス・ヘラー)と思っているわけです。

この選挙が危なくなっている。今回の選挙の投票率は、知事選、議会選とも史上最低で、知事選は六三・二一%、道府県議選は六八・四七%と、それぞれ前回よりわずかずつ減っている。戦後史全体の流れをみても、この棄権率が傾向的に大きくなっている。東京の場合は今度は五〇%以上が棄権したわけだ。

ただ、福岡と北海道は投票率が上がっていき、朝日新聞の石川真澄氏の分析によれば、この高投票率と革新勝利は相関関係がある。絶対得票率で革新の側が二%上積みしたことが決定的だといわれています。

いずれにしろ、この棄権の問題を革新勢力は真剣に考えなければいけないのではないかと思うわけです。

第二の点は、支持政党なし層の問題です。この層は、戦後史のなかで投票率の低下つまり棄権層のふえ方よりもいっそう傾向的にふえてきています。三月の毎日新聞の世論調査では、東京で二五%、自民党の四四%に次ぐ第二位です。しかも無関心層では必ずしもなく、都会の若者に多い。

問題は、保守の側がこの支持政党なし層をも射程に置いた草の根掘り起しを進めてきていることです。その方法は、企業共同体、労使協調による丸がかえ、地域レベルでの生活利益を通じた組織化ですが、やり方がソフトになってきていることが特徴です。つまり、

【討論】

支持なし層を結集する

政策、運動の課題

二宮 七〇年代の半ばに新自由クラブが登場した時に、いわゆる新中間層が問題になりましたね。この新中間層と加藤さんの話の棄権層とダブっているようですね。これを革新的

高度成長過程で形成されてきた経済大意識、そこで醸成されてきた中流意識や私生活中心主義と呼ばれるものにあわせていく。さつき古城さんが出した改憲については、自衛隊の存続を容認し、かつ第九条の文言は少ししかかえないというかたちで、これらの層の意識水準にあわせた実質改憲運動をすすめるうとしていく。

第三点は、政治そのもの、選挙そのものもどう活性化させるかということです。自民党の長期単独支配が続いていて、政治参加に対する有効性感覚が失なわれ、無力感が醸成されてきている。もともと棄権という政治行動

とみるか、新しい保守の担い手とみるかは大きな違いだと思います。私は潜在的革新の力ありとみるのですが。

加藤 棄権層には無関心層と支持政党なし層があると思いますが、六〇年代以降ふえているのは明らかに後者です。この支持なし層は、反国家意識は非常に強く、個人の自由を重んじる。この面は歴史的に肯定的にとら

には現実政治に対する消極的異議申立ても含まれているわけですから、政党の役割は、選挙の中で自党の勢力を拡大することはもちろんだけれども、いわば臨時的に政治に入り込んでくる層、臨時的市民を、いかにして恒常的に政治に参加させるのかというところにも一つの役割があると思います。

関連していえば、無党派層、棄権層を政治的に活性化させる問題は、地域の自治、民主主義の重要なテーマでもあると思います。自治とは地域における全住民の政治参加を前提とするからです。

えていいと思うんです。若ものに多いこの層は、何よりも行動の選択肢をいっぱい持っている。革新の側が一点突破の要求や全面的政策を出しても、それとチャンネルがあわなければのってこないという性格がある。

古城 臨時的市民、臨時的政治参加の層がふえると革新自治体化するというのは、僕も実態調査を通じて感じています。その時には、

自民が減って多党化してくるからです。この層はある意味で、ライフスタイルを選択することを身につけているわけで、棄権も一つの意識的な選択なんです。この層にのつて一時期、革新自治体がふえていった。だから、広い意味では革新の基盤なんです。

生活の質を問う直す政策を

——そういう人たちは何を基準に投票するのでしょうか。さつき、政策を訴えても票にならないという話があったけど。

二宮 革新陣営は政策を普及して票を掘り起こすために自ら燃えたのは間違いないと思うんです。ただ、いまの加藤さんの話をきくと、選挙そのものに冷たいという状況があったのかとも思う。

加藤 棄権層とくに無党派臨時市民が選挙に燃える状況を、選挙の政治過程の各段階、レベルでどうつくっていくかが問題です。たとえば、若い人に若い感覚でピラをかせて、それを自分のコミュニケーション回路で配っ

てもらおうというような工夫も考えられますね。選択肢が多元的になっていきますから、さまざまな階層にそれぞれあわせた政策を、その階層の人たち自身の力で考えてつくってもらうような発想が必要になっていっていると思う。とくに首長選では。

古城 それは新しい特徴だと思うけれど、もう一つ、かつて住民運動を担った層、生活破壊、環境破壊に反発した層ですね。この層はいま、福祉、教育、医療の問題を抱えているわけで、これも政策の柱にしなければいけないと思います。

二宮 それと文化の問題ですね。いまモレーツ社員は、会社の中で非常な精神労働、神経労働を迫られていて、たとえば四〇代中堅層は、精神をやたらに使わされて人間関係がまずくなっている。それでヒューマン・リレーションの本がやたらに読まれているんだけど、その人々は、企業から解放されて、家に帰ってフロに入って一杯飲んで寝ても、それだけでは疲労が回復しない。人間、頭を使えば使うほど、疲労を回復したり生活をとり

戻すためには、逆に頭を文化的に使わなければいけない。そういう意味で、生活の質を問う直す文化の政策が重要になっていると思います。

古城 今度の選挙、争点がなかった、スレ違ったなんていわれているけど、最初に二宮さんが言ったように、政策上の争点は明確だったと思うんです。その政策を発展させていけば、僕は、平和と民主主義と自治という課題につきあたると思う。

革新勢力は、議論されたように、政策面でも運動面でも新しい状況に見合ったスタイルを組んでいく必要があると思う。しかしこれは急速にはいかない。当分は、一勝一敗、せりあいたと思う。そういうことをにらんで、組織戦、陣地戦、競り合いをつめていくことにならざるを得ない。それを持続していくだけの成果は今回の選挙はあったのではないかと思えます。

——これで結論にしたいと思えます。長時間ありがとうございました。

(八三年四月一四日)